

會學濟經學大國帝都京

叢論經濟

號五第 卷三十五第

月一十年六十和昭

論 叢

普通銀行及特殊銀行の金融統制…………… 經濟學博士 小島昌太郎

國家資本の諸問題…………… 經濟學博士 谷口吉彦

江戸時代の經濟機構…………… 經濟學士 堀江保藏

李悝の平糶法に就いて…………… 經濟學士 穗積文雄

法幣爲替の補強工作…………… 經濟學士 徳永清行

時 論

戰時下における水産業…………… 經濟學博士 蜷川虎三

研 究

古代猶太共同體の形態…………… 經濟學士 澤崎堅造

說 苑

下請制工業と社會的分業…………… 經濟學士 田杉競

出產統計に於ける季節的變動…………… 經濟學士 青盛和雄

附 錄

彙 報

外國雜誌論題

江戸時代の經濟機構

堀江保藏

本稿は、生産機構・流通機構・領域經濟と全國經濟の三節に分つて、江戸時代の經濟機構を概観したものである。意圖するところは、貨幣經濟の著しき進展を含んだ封建經濟の構造を鳥瞰し、以て經濟政策を要請する經濟問題・社會問題の生ずべき基底を明かにせんとするにある。従つて本稿に於ては敢へて結論を導き出さなかつたが、この結論は、他日機會あらば、「江戸時代の經濟問題」なる形式に於て、改めて起稿したいと思つてゐる。讀者の諒承を乞ふ。

一 生産機構

江戸時代の社會關係は封建的であり、而もそれは幕府を頂點とする一個のピラミッド型に構成せられた中央集權的封建制度であつた。その下に於ける封建領主は幕府自身及び二百數十の諸侯であつて、更に下層の領主もあつたけれども、その重要性は無視するも可なるものであつた。かくて當時に於ては、幕府及び諸侯とその領民との封建的關係のうち經濟關係が存し、そこに當時の社會の經濟構造又は下部構造が見られたのである。

この經濟構造に於て、生産の中心をなすものが農業生産であり、その擔當者が百姓であつたことは、いふ迄もないところであつて、如何にそれが重要な地位を占めてゐたかは、普通に農村人口が全人口の八割を占めてゐたと推定せらるゝによつても明かである。農業生産の本體は田畑の耕作にある。この田畑は百姓と領主との間の封建的關係の媒介となつたものであつて、従つて百姓の奉仕する年貢は、資本家社會の地租とはその考へ方に於て

頗る趣を異にした。例へば當時の租率を稱する免なる語は、本來は年貢として徴收した殘餘即ち作德米を百姓に免し與ふる意であること、年貢が收益税に非ずして收穫税であつたこと等、年貢の本質を最もよく窺はしむるのであらう。

換言すれば、田畑耕作の理念は、百姓の生活手段といふ點にあつたのではなく、領主に經濟的基礎を提供するといふ點にあつた。爲永春水が唱ふるところの『農は納なり』¹⁾てふ標語は、この理念を最も端的に表現するものであらう。幕府・諸侯が田地永代賣買を禁じ、分地を制限し、百姓に居住移轉や職業選擇の自由を原則として認めず、更に生産生活は勿論消費生活に至るまで、些末の點に互つて干渉を加へたのは、かゝる理念よりして當然の事柄であつた。また領主が義倉・社會などの施設によつて凶歲に備へ、凶歲には夫食種貸等の方法によつて極力窮民の救済に任じたのも、亦當然の事柄であつた。

要するに、當時の田畑耕作は、少くとも販賣の目的で行はれたものではなかつた。價格が生産の増減を制約したのではなかつた。かくて『農民は五穀の價を知らざるを良農とす』²⁾とも稱せられたもので、この言葉は計量的な百姓もあつたことを物語るものであるが、かゝる計量が爲されたとしても、その範圍は限られてゐた。蓋し上述の理念と開聯して、田畑の年貢は原則として米納であつたからである。

勿論米は商品として市場に現はれた。否當時米は最大の商品であつた。併しその商品化する過程は、農家の作德米の自家消費部分を除いた殘餘が商人を通じて商品化せらるゝか、若くは年貢米が封建領主またはこれより餘米を受くる武士を通じて商品化せらるゝか、何れかであつて、特に大市場に於ては後者の方が主要であつた。江戸時代の經濟を土地經濟と呼び、之を貨幣經濟と對置するのは、當時の主要生産手段が土地であり、主要生産業

1) 「通俗經濟文庫」第6卷、311頁。

2) 「日本經濟叢書」第22卷、415頁。

が農業であつたことのみによるのではなく、實に土地が封建的社會關係の主たる媒介であり、農業がかかる關係の下に營まれてゐたことによるのである。こゝに生産機構の根本がある。

當時の農家經濟は、時代の経過と共に次第に貨幣經濟に織込まれる度合が進んだが、今日に比すれば自給自足の度合は高かつた。この事は農耕と手工業とが廣汎に結合されてゐたことを意味する。加之、大量的・全國的に消せらるゝもの、例へば生絲・木綿織物・麻織物・紙・蠟・漆・砂糖・鹽・藍玉などは殆ど總て農村に於て生産せられた。これは専門手工業者の殆ど存しなかつた王朝時代の傳統によるところであるが、それには更に原料との關係をも考へねばならぬ。即ち化學工業や金屬工業の發達してゐない當時に於ては、大量的に需要せらるゝ工業製品は、農作物を直接の原料とするものが多かつたのであつて、加ふるに製造工程が概ね單純であつたら、農村手工業は廣汎に存続し、發展し得たのである。勿論上述の諸工業が、農村の各戸を通じて一様に行はれてゐたといふのではなく、都市對農村の關係から見ても、概して農村工業であつたといふ意味である。

王朝時代には、此等工業製品の一部は庸・調として上納せられ、他は白家用に供せられ、極めて少量のものが市に持出された。併し江戸時代には租税として上納せらるゝものは殆どなく、白家用に供し及び商品として販賣に供せられた。山口藩が領内の山代地方に年貢として紙を課したやうな例があるが、それは同地方が産米に適せず、製紙を以て主産業としたからである。かやうな例は外にも多く存することと思ふが、それは寧ろ例外であつて、更に白家用に供するよりも寧ろ販賣に供する目的で生産せらるゝ場合も少くなかつた。これは既に中世に於て見られた傾向であるが、江戸時代に入つて益々盛んになつたものであつて、地方特産物として名を謳はれたものは、概ねかかる商品化した農村工業製品であつた。

かくの如く農村手工業は年貢といふ關係から解放せられてゐたとはいふものゝ、封建的社會關係そのものから解放されたわけではなかつた。即ち原料である特用農産物の栽培は、五穀特に米作の妨げとならぬ範圍内に於てのみ許されたものであり、また農耕を抛擲して手工業に専心することは許されざるところであつた。従つて農村工業は、田畑耕作と比較すれば頗る商品生産化してゐたとはいへ、全然それと別個の範疇に屬したわけではなかつた。かくてそこには、強制的性質を帯びた國產獎勵政策が行はれ得たのであり、また國產の專賣さへも行はれ得たのである。

工業は勿論都市にも行はれた。多くの都市には大工・左官・鍛冶・疊職・建具職・履物職などが居り、また織物・染物・武具・裝身具・調度其他の日常生活用品や趣好品が作られた。商業都市として知られた大阪にも頗る多種類の工業が行はれ、酒造業・絞油業・晒蠟及び蠟燭製造業・染物業・賣藥製造業など頗る盛大であり、生白粉・丹・刻昆布・精銅、或は打綿用の唐弓弦などは大阪を殆ど唯一の生産地とした。工業都市と知らるゝ京都は美術工業の中心地であつて、西陣織を始め染物・刺繡・漆器・陶磁器・七寶・木竹細工などの製品は、質に於て天下に冠絶するものがあつた。政治の中心地である江戸に於ても、各種の日常生活用品工業や美術工業が起つた。

都市の手工業者は普通に職人といひ、之には幕府・諸侯の御用を勤める御用達職人と平職人との身分的差違があつた。前者は特權職人であり夫々の職の棟梁であつて、江戸にはかゝる職人は百數十人あり、幕府より扶持を受けて生活し、屋敷を給與せられたものもあつた。大阪の所謂三町人もそれであり、京都の中井主水は禁裡の御用達にして、畿内及び近江の大工・木挽・杣の三職は皆その總管するところであつた。更に江戸に於ては、諸職人の集住する町々に國役と稱して夫役（勞務奉仕又は銀納）が課せられ、諸藩に於ても水役・大工役などと稱して大

3) 拙稿「江戸時代の國產獎勵」(本誌、第51卷1號)参照。

4) 拙稿「江戸時代の大阪の工業」(本誌、第51卷5號)参照。

工其他の職人に夫役を課した⁵⁾。此等の特權職人の制度や職人に對する夫役課徴の制度が何處にその源流を發するか、恐らく王朝時代の工匠の上番制度や中世の座の制度に之を求めることが出来るのであらうが、何れにしてもかゝる制度下の職人の身分には、封建的色彩が頗る濃厚であつた。

併し多くの手工業者はかゝる制度下にあつたのではない。賃仕事乃至は注文生産ではなく、商品生産をなす手工業者、これは普通に職商人と呼ばれたが、概して彼等は身分的に自由であつた。手工的工場工業の形態にまで發展した諸工業、例へば酒造業・晒蠟業・絞油業・或種の織物業などの經營者も同様であつた。従つて此等の工業に於ては、封建的な特權又は奉仕の關係を離れて經營を行ふことが出來た。尤も封建的精神の横溢せる當時、その經營が自ら傳統に拘束せられたことはいふまでもなく、殊に同業者相寄つて株仲間を組織せる場合、仲間自體の統制乃至は仲間を通じて具現する封建領主の統制に服しなければならなかつたことは、詳論するまでもない。

以上農村及び都市の工業を、主として封建的社會關係といふ觀點から眺めたが、その關係の厚薄如何に拘らず、農業生産が封建領主に經濟的基礎を提供することを理念としたのに對し、工業生産は概して生産者の家計維持乃至は利潤の獲得を理念とし、従つて生産は直ちに賣買に繋つてゐた。殊に原料を仕入れてこれに加工するといふのが一般的形態であつた都市の工業に於ては、技術的意味での生産の前後に賣買の過程が隨伴したものであつて、生産者の立場からすれば、生産は同時に資本の回轉であつたのである。

かくの如く農業生産と工業生産とはその性質を異にしたが、兩者の間には頗る密接な關係があつた。今之を需要・供給の視角から眺むるに、農産物を需要するものは商工業者であり、之を供給するものは領主・武士及び百姓であつた。之に對して工産物を需要するものは此等の總てであり、之を供給するものは工業者及び百姓であつ

5) 「日本經濟史辭典」國役・水役銀の各項參照。

た。市場なる語を用ふることを許されるならば、農産物市場及び工産物市場を通じて、此等の需要と供給とは極めて錯綜し、農業生産と工業生産とは頗る密接な關係の下に置かれてゐたのである。

かゝる關係は中世殊にその後期以來見られたところであつて、江戸時代に入つてその度合が如何程高まつたかは、之を明確にするを得ないけれども、平和の到來及び生活の安定に伴ふところの、生活向上の欲求並に生産そのものゝ發達を考慮するならば、その度合には中世と比較にならぬものが存するであらう。普通に自給自足的な生活が支配的であつたと稱せらるゝ江戸時代初期の農家經濟も、その頃發布せられた消費生活に關する觸書其他より察するならば、その自給自足性をあまりに強調することは一考を要するところであらう。

ところで茲に注意すべきは、右の關係の結び目として先づ重要な地位を占めたものが、幕府・諸侯及び一般武士であつたといふことである。この事は武士の集住する城下町が商品の集散市場として重要な地位を占めたことによつても窺はれる。城下町其他の都市には商工業者も集り住み、工業製品を生産し消費すると共に農産物を消費した。その工業製品は一部分農村へも流入したのであり、同時に都市の發達は農村の副業的手工業を、自給自足的生産から商品生産へ、漸次發展せしめたのであつて、かくて農業生産と工業生産とは頗る密接な關係を持つことになつたのである。

右の幕府・諸侯・武士は、その生活の基礎を農業生産に置いてゐた。この農業生産は江戸時代を通じて頗る發展した。之を示すものは耕地面積の増加、農耕技術の進歩、作物種類の増加などであつて、かゝる發展と生活の向上とが均衡を保つ限り、農業生産と工業生産とは釣合を保ち、領主・農民共に不安なき生活を送ることが出来た。即ち領主の財政の窮乏や武士の生活の困窮は切實には感ぜられず、農村に於ても生活の向上を伴ひつゝ人口

6) 野村博士「徳川封建社會の研究」404頁以下。

が増加し得たのである。これが即ち江戸時代初期の一般的状态であるが、中期以後になると右の釣合は次第に破れて来た。領主及び農民の生活向上と農業生産とが均衡を失つたからであり、農業生産の發達にも拘らず生活上の欲求がそれ以上に増大したからである。而してそれは財政及び武士の家計の窮乏、農村人口の停滯その他の現象となつて現はれた。

要するに、性質を異にする農業生産と工業生産、この二つの特異な併し密接な結び付き、こゝに江戸時代の生産機構の特異性があり、その機構自身の發展のうちに諸々の經濟問題の種が藏されてゐたのである。

二 流通機構

中世以來次第に發達しつゝあつた國內商業・外國貿易共に、江戸時代に入りて益々盛んになつたが、そのうち外國貿易は寛永の鎖國と共に俄かに衰へた。よつて茲では外國貿易を一應考慮の外に置き、國內商業を中心として流通機構を見ることゝしよう。

商業は、經營學的に見るときは、商品配給の媒介行爲を本質とするものであるが、經濟學的に見るときは、商品の社會的・人格的流通、詳しく云へば個別經濟的に分離せる生産と消費（生産的消費をも含む）との社會經濟的統一を擔當するものである。従つて商業の發達はかゝる生産と消費との分離を前提とするものであり、發生的には個別經濟に於ける一定財貨の餘剰生産の存在を前提とする。江戸時代に於てこの前提が農業及び工業生産の發達によつて形成せられたことは、前項に述べしところによつて明かであるが、更に生産の發達自身が逆に商業の發達によつて促進せられたことも、こゝに説明する迄もない。

生産の發達を前提とし、貨幣制度の整備や交通機關の發達等の諸條件に恵まれて、商業は頗る發達した。その内容の第一は専門商人の發達並に商人間の職能の分化であつて、後者は問屋・仲買・小賣の區別が判然として来たことを意味する。第二は市場の發達である。所謂市場とは要するに、需要者と供給者とが繼續的に相交通することによつて、一の價格の成立する組織である。かゝる意味での市場は、部分的には中世期に成立したであらうが、それが發達したのは江戸時代に入つてからであつた。而して市場商品として先づ現はれたのは米であつて、時代の経過と共に市場商品の種類・數量共に増加し、また市場の地域的範圍も次第に全國的となつた。この市場の中心を占めたものが大阪であつて、即ち全國的な商品の集散地であつたばかりでなく、價格形成の中心地でもあつた。

商業の發達に關聯して信用制度も亦顯著なる發展を示した。中世の信用制度は、その機關として質屋・土倉などが重要性を持つたことによつても知られるやうに、消費信用を主としたものであるが、江戸時代には之に加ふるに商業信用が發達した。兩替商の發生並に兩替商の業務の複雑化がこれを示すものであつて、それは要するに商品取引が發達して、生産と消費とが人的に或は場所的・時間的に著しく分離した結果に外ならない。金・銀・錢の三貨が聯立的にして今日の意味に於ける本位貨幣・補助貨幣の關係になかつたこと、それが兩替制度の成立を促した主たる動機であるが、貨幣の兩替を必要とした主なる事情は、商取引そのものに外ならなかつたのである。而して信用取引は兩替商や各種の金貸業者のみによつて行はれたのではない。問屋などの商人も生産者に対する前貸の形で、廣く信用取引を行つた。

以上の如く、商業並に信用取引が發達したが、こゝに改めて述ぶべきは、それが封建的社會關係の域外に於て

行はれたのではなかつたといふことである。繰返して述べる如く、當時の最大の商品は米であり、その商品化に最も重要な役割を演じたものは幕府・諸侯及び武士であつた。幕府に於て貢米を收納する藏を御藏と呼び、江戸・大阪・京都を始め長崎・大津・高槻・駿府・清水・甲府其他の各地に設けられた。その收納米高年々六七十萬石にして、それは大部分切米・役料等の俸祿的性質の支出に充てられてゐるところより見ると、天領四百萬石中の四分の三以上は商品化せられたと考へ得るであらう。諸侯は大阪・江戸・大津・敦賀・長崎等に藏屋敷を設けたが、それは當初専ら貢米賣捌のための機關であつて、殊に大阪に於ては、一ヶ年の入津米凡そ四百萬石のうち、諸侯の拂米は四分の三を占め、堂島の米市は實にこの藏米を中心として立てられたものであつた。時代の経過と共に藏屋敷から拂出される商品は次第に増加した。一般武士が賣拂ふ米の量も、亦無視するを得ない額に上つたことであらう。

此等の米や他の商品の賣拂ひは、商は末業なりとせられた當時のことであるから、商人に委託して行はれた。大阪の藏元、江戸の札差はその最も著名なるものである。農家が販賣に供する農産物及び工業製品には、地方地方の市其他に於て、直接に消費者へ販賣されるものも多かつたが、それ等が商品として市場へ入り込む限りに於ては、その賣買を掌るものが商人であつたことはいふ迄もない。問屋による資本の前貸が、多く大量的に需要のある種類の農村工業に對してなされた事實は、これを最もよく説明するものであらう。

信用取引を掌るものが商人であり、その相手方として商人自身が重要な地位を占めたことは、商業の發達した當時のことであるから、勿論説明を要しないところである。併し、例へば江戸・大阪・京都の本兩替が營む金銀賣買・貸付・手形振出・爲替・預金などの業務のうち、爲替業務や貸付業務に於ける相手方としては幕府・諸侯

も頗る重要な地位を占めた。三井組が幕府の爲替御用を勤めたことはいはずもがな、三都の兩替屋は概ね諸藩の御用達を勤めて爲替や貸金の御用に任じた。この貸金が即ち周知の大名貸である。三都其他に存した錢兩替は主として錢の兩替を行つたものであるが、江戸に於ては武士を相手方とする取引が頗る盛んであつた。⁸⁾

地方都市に於ても事情は略々同様であつた。特に述べべきは城下の用達町人の藩札發行業務である。藩札の發行は元より藩の高權に屬したが、發行並に引換の實務を擔當したものは札元に起用せられた資産家であつて、それは彼等を起用することによつて財政上に利用し得べく、又彼等の信用に基いて藩札の圓滑なる流通が期待せられたからである。

以上の不生産的な信用取引に對して、當時の生産的な信用取引は、工業に對する資本の前貸の形で行はれた。資本の觀點よりすれば商業資本であり、工業經營の觀點よりすれば問屋制家内工業である。資本の前貸は問屋若くは問屋業務を營む貸金業者であつて、その相手方には都市の小工業者や家中工業を營む武士もあつたが、主要なるは農村工業者であつた。⁹⁾これ大量的に需要せらるゝ日常生活用品が、主として農村工業製品であつたこと、照應するところである。然るに前述の如く、この農村工業は封建的生産の一翼として頗る重要な地位を占めてゐた。これだけでもかゝる信用取引が封建的社會關係の埒外に於て行はれたのでないことを窺はしめるが、よりよく之を示すものは、かゝる工業が諸藩の國產獎勵政策の對象となり、その政策の實行者として問屋が直接間接に關與した場合が少くなかつたことである。國產獎勵と密接に關聯して、諸藩も亦商業資本家として工業に臨み、國產專賣の形態が現はれたが、この場合にも問屋は排除せられたものでなかつた。

以上、生産物の商品化の過程より見るも、信用取引の關係より見るも、流通の機構は生産の機構と密接な關係

8) 「安田銀行六十年誌」9頁。
9) 土屋喬雄氏「日本經濟史概要」206頁。尙ほ拙稿「江戸時代の大阪の工業」(前掲)參照。

にあつた。その主なる内容は、約言すれば、生産の發達を前提として商業・金融等が發達し、それがまた生産の發達を刺戟したこと、商業が發達して所謂市場が形成せられ、一見之と無關係であるかの如く見ゆる封建領主・武士及び農家が、實は最も密接な關係にあつたこと、流通機構の擔當者である商人の活動が主として此等の人々との關係に於て行はれ、従つてその購買力及び資本の蓄積が主としてこの關係に基いてなされたことなどである。要するにかくの如き生産機構と流通機構とが一體となつて江戸時代の經濟機構を形成してゐたのである。

三 領域經濟と全國經濟

封建的な生産及び之と離るべからざる關係にある流通、それは一體となつて江戸時代の經濟機構を形成したものであるが、併しその經濟機構が國民經濟的な全一體にまで高まつてゐたものでなかつたことは、封建制度の政治的部面即ち土地・人民に對する主權の分割といふことを顧みるならば、容易に肯けるところであらう。即ち諸侯は將軍の政令に服し、全國的な經濟機構のうちに織込まれ乍ら、尙ほ夫々獨立の財政・經濟を營んでゐたものであつて、そこに所謂領域經濟の存立が見られたのである。

領域經濟は中世に於ける大名領地の成立と共に誕生したものであるが、その可能性はいふ迄もなく、大名領地が貴族又は社寺の莊園の如く分散的でなく、概ね一所に集中してゐたこと、並に都市が封建的政治機構のうちに完全に包攝せられたこと等に存した。江戸時代の状態を見るに、天領が全國各地に散在したのに對して、諸侯の領地は概ね一所に集中してゐた。諸侯のうちでも譜代大名の領地は、それが恩賞として新たに與へられたものである關係から、飛地と稱してその幾分が各地に散在するものも稀ではなかつたが、外様大名のそれは頗る集中的

であつた。¹⁰⁾

譜代たる和外様たるを問はず、大名は自己の領地に對して強大な領主權を認められたものであつて、この領主權に基いて所謂藩制が成立してゐた。この領地を地域とし領主を中心として形成された經濟が領域經濟であつて、藩の財政が幕府の財政から獨立してゐたことは勿論のこと、城下町其他領内の都市を中心として形成された流通機構も、一應全國的流通機構から獨立してゐた。尤もこの後者は元來は自然的な生成であらうが、人爲的に形成せられた點も少くない。津留め乃至は關稅による商品移出入の制限、白給自足目的の國產獎勵などがその獨立に與つて力があつた。更に江戸時代中期以後になると、諸藩は概ね藩札を發行したが、それはいふ迄もなく領内にのみ通用する紙幣であつて、それが主たる通貨となつた場合には、自ら領内經濟は全國流通から獨立せざるを得なかつた。

繰返して述べれば、諸大名は自己の領地並に領民に對する政治的支配者であると同時に、領域經濟の支配者であり、領域經濟政策の主體であつた。より高段の經濟政策の主體として幕府があつた。併し鎖國下の當時のことゝて、國際經濟關係を前提とする國民經濟的立場からの經濟政策は、殆どその重要性を持たなかつた。之に對して諸藩の經濟政策は、領域經濟が既に全國經濟の中に織込まれてゐる状態に於ては、その死活に關する事柄として重要視せられねばならなかつた。等しく封建領主と稱するも、將軍と諸侯との間に著しき性格の相異が見られた所以は茲にある。

上述の如く、諸藩は能ふ限り領域經濟の獨立を維持せんとしたが、その全國流通からの完全な獨立は、いはば一個の理念に過ぎず、希望的理想の状態に外ならなかつた。即ち商品の全國流通の傾向は緩々として進み、諸藩

10) 牧博士「日本法制史概論」289—290頁。

の自給自足經濟への努力にも拘らず、領域經濟は全國流通のうちへ次第に深く織込まれて行つたのである。

元來全國流通の發達は、各地方々々の消費需要が次第に均等化する傾向にあるのに對し、生産供給は各地間に多少ともに差違あるが故に、その需要と供給とを適合させる上に相互に財貨の交換を行ふを便宜とし、また必要としたところから生じたものである。而してそれは中世期以來徐々に現はれたものであつて、初期の状態は恐らく不規則的且つ間歇的であつたであらうが、江戸時代に入りて次第に規則的・恒常的となり、時代の經過と共にその度合は愈々高まつた。大阪が天下の臺所として謳はれた所以は、そこが隨一の商品の集散地であり、全國流通の最も大なる結節點であつたからに外ならないのであつて、江戸時代初期既に干鯛・材木・木綿・油等の問屋があつて、畿内・西國・江戸を範圍とする取引に従事してゐた。¹¹⁾ 諸侯が米を大阪に輸送して販賣することが既に豊臣氏時代に始まり、江戸時代に入りて藏屋敷が續々設けられたことは、いふまでもない。

全國流通の發達と共に、そこには共通の價格が成立した。荻生徂徠の享保年間の著「政談」に「商人の勢盛に成て、日本國中の商人通じて一枚と成、物の直段も遠國と御城下と釣合て居る故、數百萬人の商人一枚になりたる勢には勝れぬ事にて、何程御城下にて御下知有ても、物の直段下らぬ筋も有¹²⁾」とあるのは、その状態を説明したものである。更に個々の商品の價格は相互に密接な關係を持つことになつた。この事は室鳩巢の「兼山秘策」に「一物の價の高く成候へば、夫に連る萬物の價の高く成候謂は、諸奉行中書付の如くに候に付¹³⁾」と見ゆるが如く、當時の識者も既に明確に認識せる事柄であつた。

扱て、江戸時代に入つて全國流通の發達を促した特殊事情に就ては、前項に於て既に述べたが、こゝに繰返し説明を加ふべきは、天領の役割に就てである。幕府は全國に對する政令の出づるところではあるが、領地の關係

11) 「大阪市史」第一、348頁以下。
12) 黒正博士解題「荻生徂徠集」83頁。
13) 「日本經濟叢書」第2卷。223頁。

より見れば一個の大なる領主に外ならなかつた。併しその領地即ち天領は全國に互つて散在し、到底領域經濟を形成し得る性質のものではなかつた。この状態よりするも、將又幕府の商業自由の態度よりするも、當然天領は自由市場として開放さるべきものであつて、而もそこには大阪・江戸・京都其他の全國流通の中樞となるべき大都市が存した。かくて江戸時代の全國流通は、この自由市場特に大阪・江戸の二大都市を中心としたのであつて、この點は常に念頭に置かれねばならぬところであらう。

全國流通の擔當者は勿論商人であつた。中央から地方へ、地方から中央へ、物及び貨幣の流通を擔當し、以て領域經濟の全國流通への聯繫に大いなる役割を演じた。併しかゝる聯繫が、また領域經濟の主人である諸侯によつても果されたことを忘れてはならない。それは先づ貢米及び其他の國產の賣拂ひによつてなされた。諸藩が米其他の國產を賣ることを必要とした最も重要な事柄は、參觀交代制度である。いふ迄もなくこの制度によつて、諸侯は國許と江戸との二重生活を餘儀なくせられ、而も江戸生活費並に道中入用は、之を自己に鑄造發行の權なき正貨を以て支出しなければならなかつたからである。更に之に生活の向上が加はり、結局三都其他の富商から信用を受けなければならぬ状態に立至つたが、その擔保として乃至は辨濟の手段としても、亦米其他の國產を中央市場へ搬出することが必要であつた。藏屋敷より賣拂はれる米以外の國產が、時代の経過と共に種類及び數量を増加したのは當然の事柄であつた。かくて諸侯は領域經濟の自給自足を理想とし乍ら、全國流通の傾向には抗し得ず、意識せると否とに拘らず、自ら全國流通の發展に大いなる役割を演じたのである。

この全國流通を指標として、そこに現はれた經濟の全體を全國經濟と呼ぶ。或は之を國民經濟と名付ける人もあるが、¹⁴⁾敢てこの稱呼を用ひないのは若干の理由があるからである。成る程貨幣及び度量衡は全國的に統一せら

14) 例へば菅野博士「大阪經濟史研究」2頁以下。

れ、商品は全国的に流通し、幕府の政令は全国に及んだ。けれども今日普通に所謂國民經濟なる概念は、世界經濟・國際經濟關係を豫想した概念であり、また歴史的には近代國家的統一と共に現はれた概念であるが、江戸時代の我國の經濟は國際經濟的關係から遊離して居り、また中央集權的に統一せられてゐたとはいへ、完全な近代國家的統一にはまだ若干の距離があつた。この距離を構成した主なる事情は、前述の領域經濟の存在であつて、それは全國流通のうちに織込まれてゐたとはいへ、そこには獨立の政策主體があり、また商品の流通を妨げるが如き施設も行はれた。

尤も用語の當否は重要な問題ではない。重要なはその内容であつて、即ちこの領域經濟を含む全國經濟、それがまさに中央集權的封建制度の經濟的側面であつたことを理解すれば足る。換言すれば江戸時代の經濟機構は、單なる生産及び流通の機構に加ふるに、如上の意味での全國經濟的な機構を以てすることによつてよりよく理解せられるのであり、特に當時の經濟政策を諒解するためには、かゝる全國經濟の成立せる状態、並に全國經濟の統制者として幕府、領域經濟の統制者として諸侯が存在せることを、先づ知つて置かねばならないのである。